

令和元年度 創立145周年記念式典 校長式辞（11月26日）

菊薫る秋の佳き日に、同窓会理事長入江泉様、PTA会長永山雅己様をお迎えして、創立百四十五周年の記念式典を挙げていただけますことは、大変感慨深く、また、大きな喜びであります。

145年という歴史は全国的にも屈指の長さですが、本校の起源はさらに遡ることができます。寛文6年（1666年）、岡山藩主・池田光政公が岡山城西ノ丸、現在のこの岡山市民会館のあたりに設けた藩校まで行き着くことができ、全国でも稀な、長い歴史をもつ学校と言えます。

その後、岡山の藩校を含め、旧来の藩校は政府の政策で一律に廃止されましたが、明治7年（1874年）6月、岡山城西ノ丸跡に、教員養成の目的で温知学校が開設されます。8月には教員志望ではない生徒も受け入れることになりました。本校はこの年をもって、創立の年としています。

明治12年（1879年）には、岡山中学校として独立、その後、明治29年（1896年）11月21日、岡山城城郭内に新校舎が完成し、移転しました。11月21日を創立記念日とする所以はここにあります。大正10年（1921年）には、入学競争の激化に対応するため、現在の岡山操山高校の前身でもある岡山県第二岡山中学校の設立に伴い、本校は岡山県第一岡山中学校いわゆる一中となりました。

一方、昭和11年（1936年）には、岡山県第二岡山高等女学校いわゆる二女が新設されました。その後、戦後の教育改革が進められる中、この二校はそれぞれ、岡山県立岡山第一高等学校、岡山県立岡山第二女子高等学校となり、昭和24年（1949年）8月、両校は統合されて、岡山県立岡山朝日高等学校となりました。そして、昭和28年（1953年）、分散していた校舎が全て旧制第六高等学校跡地である、現校地に移転・統合され、現在に至る本校の姿が整いました。

旧制高等学校は、全ての旧制中学校生徒に憧れの上級学校でした。その校地を本校が受け継いだことは、全国の高等学校でも例外的なことであり、操山を背景とする美しい自然空間と知的教養を志向する精神空間を引き継ぎ、本校の校風に多大な影響を与えています。

本校は、創立以来、高い教育水準と格調高い校風で、多くの優秀な人材を輩出してきました。「日本の現代物理学の父」と呼ばれる、仁科芳雄博士、日中国交回復に尽力された、岡崎嘉平太氏など多数の先輩が、各界で、世界や日本をリードして来られました。昭和33年（1958年）、星島二郎衆議院議長、田中耕太郎最高裁判所長官、岸信介総理大臣は、三人とも本校に学ばれた方々であり、この三権の長の連書は、本校同窓資料館展示室で開かれた所蔵作品展に展示されています。

現在、本校同窓生は約四万人を数え、同窓生の皆さんが、各界・各分野で広く活

躍されていることは、本校の誇りとするところです。岡山朝日高等学校になってから、すでに70年の歳月が流れています。その間、「自主自律」と「自重互敬」の教育方針は脈々と受け継がれてきました。自主自律とは、なすべきことを自ら考え、自らを厳しく律し、それに基づく自由を尊重する態度を育成することであり、自重互敬とは、自らを大切にし、教養を高め、品位を保って、他人を敬愛することのできる人間になることの大切さを説いたものです。そして、これらの精神は、自分の将来とともに社会の将来にも責任をもとうとする高い志をもつことによって一層磨かれ、高まっています。

例えば、自主自律に関しては、今春の卒業式で、卒業生代表が、朝日祭の仮装行列と数学、物理を例にして、「物事はやればやるほど面白くなります。それはやれることの自由度が増すからです。しかし、その自由を手にするまでの道のりがあるということです。まず自主性を持ち、積極的に他者に働きかけなければなりません。学問においても、未知の世界の大海へと船を出すには与えられたプールや池でその操縦法を学ばなければなりません。」と述べ、さらに、その苦勞から逃げず、目の前のことに取り組んでみることの大切さを語り、この高校で学んだのは、自主自律の精神と他者との信頼関係であると述べています。

一方、平成8年の本校創立122周年記念講演では、今から68年前に本校で学び、日本政治外交史の権威である三谷太一郎東京大学法学部教授が「学問は人生にどういう意味があるか」と題した講演をされています。

その中で、次のような話をされています。学習は既に知られているものへの問いから出発し、その答えを求める過程であり、一方、学問は、未知なるものへの問いであり、唯一の正しい答えでなく、より極限值に近い近似値を求め示していく、無限の接近の過程であること。受験勉強は典型的な学習であり、受験勉強・学習の先に学問があるということを受験者本人が身をもって知ることが、高校教育独自の重要な任務であること。授業を通して受験勉強を助けると同時に受験勉強の限界を知らしめ、受験勉強の未来を指し示すことが必要であり、かつて自分が本校で受けた教育は、受験勉強後の学問への意欲を強く刺激するものであり、そのことを今日でも幸せなことであったと思っていること。

もちろん、学習はそれ自体重要なことであり、受験勉強は、自己規律を教えるという意味があり、自由に対する拘束と考えがちだが、自己抑制も自由の一つの側面であること。とも述べられています。また、ここでの学問とは、学者の行うもののみではなく、新しい知識を造り出していく精神及び身体の活動と広くとらえられています。

ここには、時空を越えた、学問や人生に対する真摯な姿勢という共通項があるように思います。

どうか皆さん、今日の日を一つの節目として、思いを新たに、朝日高校生徒としてどうあるべきか、大学や大学の向こう側の社会でどう生きるべきかを考え、未来を見つめ努力を重ねていってください。

皆さんの努力が、それぞれの人生を、一人一人の輝き方で輝かせるとともに、校歌に歌われている「昇る日の名に負う朝日」の姿に、更なる輝きを加えていくことを期待し、式辞といたします。

(県立岡山朝日高等学校 校長 竹田義宣)